城西国際大学紀要　第31巻　第２号　2023年３月　133-144

〈研究・調査報告〉

クォーター制導入における英語教育の実態調査
―セメスター制との比較―

渡　邉　治　郎

【要旨】

本稿では、2022年度から導入されたクォーター制における英語教育の実態調査を行った。城西国際大学２年生を対象にアンケート調査を行い、その結果をもとにクォーター制の利点と改善点について検討する。制度導入により、（1）制度の利点として６割以上の学生が「授業の満足度」、「学習効果」、「集中力」に対して効果が上がったと感じ、「授業進度」にも満足していることが明確になった。そして、（2）制度の改善点として多数の学生が「課題の量」、「105分授業」に対して不満を持ち、身体的、精神的負担が増加したと感じていることが明らかになった。これらの調査結果をもとに、今後の対応策を検討する。

キーワード：クォーター制、教育のグローバル化、アンケート調査、英語教育、教育効果

１．目的と研究背景

城西国際大学では、2022年度からクォーター制が導入された。従来の語学科目のセメスター制では、春学期と秋学期の１年２学期からなる１回90分、15週の授業を週２回、合計30回の受講で２単位取得できた。クォーター制への移行により、１回105分授業を対面13回、オンディマンド13回の合計26回を７週間受講で２単位取得に変更となった。クォーター制度へ移行する目的として２つの重要点があり、１点目は同じ授業科目を集中的に行うことで教育の質的向上を図ることにある。２点目は、長期休業によりまとまった時間が取れるようになり、海外留学や課外活動などの学外活動を行う機会の提供が可能になることである（城西国際大学 2022）。

本稿の目的は、クォーター制度の導入に伴い、制度の利点と改善点の実態調査を学生に行い、今後の対応策を検討する。

２．先行研究

近年、クォーター制を導入している大学が、日本国内で増加している。その背景には、平成25年に改正された大学設置基準等がある。この改正により、従来の週１コマで15週間行う従

来の講義期間から、週 2 コマで 8 週間の授業期間の設定が可能になった（文部科学省 2014）。

西本（2014）によると、全国の国立大学52大学におけるクォーター制導入の実施状況を調査したところ、すでに導入している大学が約 3 割、導入を予定しているか検討している大学が 6 割近くいる。約 9 割がすでに導入済みか導入に前向きに取り組んでいることがうかがえる。次にクォーター制を導入する目的では、最多数の意見が、グローバル化への対応を目的としている。その次に多い意見が、教育効果の向上を目的としている。なお、多くの大学がこの 2 つの意見を両方とも目的としていることが挙げられている。実際にクォーター制を導入している大学をみると、山口大学では平成25年、2013年度に導入している。授業形態は、90分授業を週 1 回 8 週間行い 1 単位としている。導入に伴う困難においては、学生や教職員からの大きな反対はなかったものの時間割を組む難しさがあったようだ。広島大学では、平成27年度から導入を開始し、90分授業を週 2 回 8 週間行い 2 単位という授業形態を採用、週 2 回の授業を同日に 2 コマ連続で行なっている。導入に伴う困難として、2 コマ連続授業の時間割作成と教員の理解を得るのが難しかったようだ。次に、岡山大学では、平成28年度からクォーター制を導入し、60分授業を週 2 回 8 週間行い 1 単位、もしくは1.5単位のように教育目的に応じて自由に設計できる制度を採用した。困難な点では、60分授業への抵抗や休憩時間の減少による移動の難しさが指摘された。愛媛大学では、平成28年度から導入され、週 2 回で15回行う、もしくは週 1 回で 8 回を 2 つのクォーターにまたがって15回の開講などのシステムを採用している。導入の利点として、集中的で能動的な学習による教育効果が期待できる。また、短期留学やインターンシップがより容易になったことが挙げられる。困難な点として、補講日の確保や時間割枠の構築が困難なことが挙げられた。神戸大学では平成28年度から導入し、90分授業を週 1 回 8 週間行い 1 単位、もしくは90分授業を週 2 回 8 週間行い 2 単位の授業形態としている。導入目的は、短期留学を促進してグローバル化へ対応することだ。導入に当たっての困難として、事務職員の作業が煩雑になることと、セメスター制を要望する学部があることだ。その他、東北大学では、通常のセメスター制に加えて週 1 回、もしくは週 2 回で 8 週間を完結する形態を採用している。東京大学では、1 コマ105分授業を13コマ実施する形態を採用している。千葉大学と横浜国立大学では、クォーター制ではなく 6 ターム制の形態を採用している。

Morita（2020）によると、広島大学ではクォーター制の導入によるメリットとデメリットについて述べている。90分授業を同日に 2 コマ連続で行うという制度により、教師はより集中的に濃い内容の授業を行うことができる。これにより、教師は学生が前回学んだことを忘れる前に教えることができるメリットを挙げている。重要なデメリットとして教師が感じることは、学生の学びがセメスター制に比べて低下していることだ。ある教師はその低下レベルは40％から50％にもなると指摘している。

文部科学省（2014）によると、早稲田大学は2013年度からクォーター制を導入している。システムとしては、セメスター制と併存する形態として、90分授業を週 1 回 8 週間行い 1 単位としている。導入目的としては、在学生が海外への短期留学に参加することや復帰をスムー

ズにすることである。さらに、海外からの学生や教員が早稲田サマースクールへ参加することが挙げられる。学生の意見として、「クォーター制は良い制度だと思う。さらに柔軟性を高めると、もっと良くなるのではないか。」、「現時点では、サマースクールやボランティアへ行くことは考えてないが、クォーター科目が増えれば、そのようなことも視野に入ってくるかもしれない。」、「学生の意思で（履修科目数の）濃淡をつけられるのは、良いことだと思う。」などがある。

近田（2018）によると、神戸大学の2学期クォーター制導入が学生にどのような学修効果があったか成果を検証している。短期留学などの学外学修活動では、導入された年度から増加幅が大きくなったが、新規のプログラムによる効果が大きいため、クォーター制の導入の成果と言えるか断定できないとしている。次に1日あたりの自主学修時間に関しては、増加していることが明らかになった。図書館利用者数に関しては、利用度が活性化したとは言えないが、繁忙期の混雑緩和には一定の効果があったと言えるようだ。その他では、研究科長、教員事務職員、学生のいずれも反対意見が根強く、担当教員や教務事務職員の負担が増大しているという声が多い。しかし、新制度が定着するにつれて、学生からは肯定的な意見が増え、否定的な意見が減る傾向が見られ、海外渡航する学生数や就学時間も増加の傾向にあるという。

城西国際大学の英語クラスでは、105分授業を対面13回、オンディマンド13回の合計26回を7週間で完結する形態を採用している。次項では、本稿の調査結果をもとに城西国際大学でのクォーター制導入における利点と改善点を検証し、今後の対応策を検討する。

３．調査内容

本項では、本調査の協力者である調査対象者とその調査方法の項目に分けて解説する。また、表1ではアンケート調査に使用した11の質問を示した。

３．１　調査対象者

本調査対象者は、城西国際大学2年生32名である。授業は、2022年度に開講した選択必修科目「Fundamentals of English Ⅱ」を受講した34名にアンケート調査を依頼、32名から回答を回収した（回収率約94％）。

３．２　調査方法

「Fundamentals of English Ⅱ」を受講した34名の学生に、授業最終日に任意でアンケート調査を依頼した。実施前にアンケート内容を学生に説明し、合意した生徒にアンケートと「研究参加への同意書」に記入を依頼した。アンケート質問項目の作成にあたっては、近田（2018）を参考に筆者が作成した。質問1から10は、4段階評価を採用、質問11は、クォーター制度の良い点と改善点を学生に自由な意見を述べてもらうために自由記述を採用した（参考資料1参照）。

表 1．クォーター制英語授業に関するアンケート調査の質問項目

1	クォーター制英語授業は、セメスター制英語授業と比べて学習効果は上がった。
2	クォーター制英語授業では、セメスター制英語授業と比べて出席率は上がった。
3	クォーター制英語授業は、セメスター制英語授業と比べて集中力が上がった。
4	クォーター制英語授業は、セメスター制英語授業と比べて宿題の量は適切だった。
5	クォーター制英語授業は、セメスター制英語授業と比べて先生やクラスメートとの人間関係が構築できた。
6	クォーター制英語授業は、セメスター制英語授業と比べ 1 クラスの授業時間数（105 分）は適切だった。
7	クォーター制英語授業は、セメスター制英語授業と比べて身体的、精神的負担が増えた。
8	クォーター制英語授業は、セメスター制英語授業と比べて授業進度は適切で、授業内容を十分消化できた。
9	クォーター制英語授業は、セメスター制英語授業と比べて授業時間外の学習時間が増えた。
10	クォーター制英語授業には、満足している。
11	クォーター制英語授業の良い点と改善点を述べて下さい。

（出典　近田（2018）を参考に筆者作成）

4．結　果

本項では、クォーター制英語授業を受講した 2 年生32名に行ったアンケート調査をもとに、4 択式回答である質問 1 から10までの回答データを図 1 に表し、各質問の数値結果を述べる。最終質問11に関しては自由記述のため、回答からその傾向を述べる。

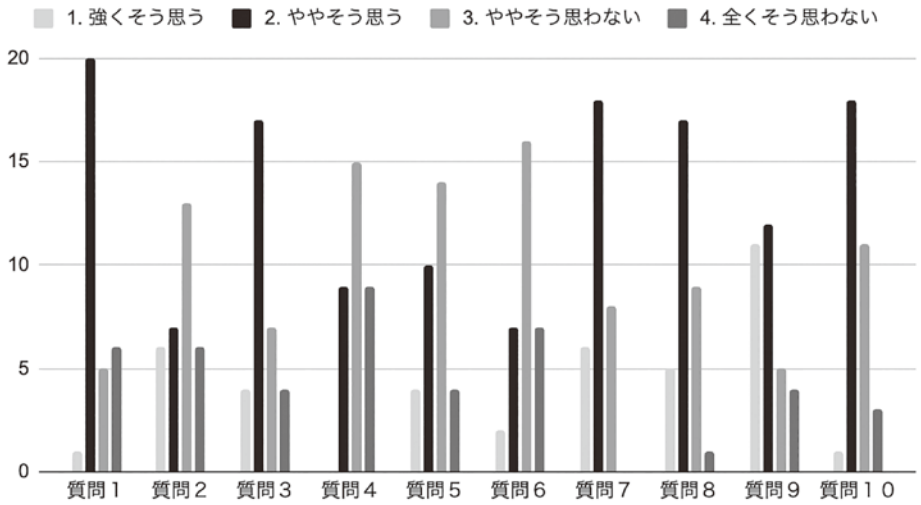

図 1　FOE 2 a

（出典　近田（2018）、渡邉・渡邉（2022）を参考に筆者作成）

まず、質問1から10までの傾向として、「ややそう思う」と「ややそう思わない」の回答が多い結果となった。肯定的な意見が過半数見られた回答は、質問1、3、7、8、9、10である。クォーター制への移行により学習効果と集中力が上がり満足していることが明確になった。その反面、授業進度が早くなり学習時間が増えたことで、身体的、精神的負担も増したことが明らかになった。否定的な意見が肯定的意見を若干上回った回答は、質問2と5である。クォーター制になり、出席率や人間関係の構築はあまり向上していないことが明確になった。否定的意見が多数見られた回答は、質問4と6となる。クォーター制になり、宿題の量や1クラス105分という授業時間に対して、多くの学生が不満を持っていることが明らかになった。図1からの特記すべき項目としては、質問4の「宿題の量は適切であったか」に関して「全くそう思わない」と、最も否定的な回答が10問中で一番多かった。さらに質問9の「授業時間外の学習時間が増えた」では「強くそう思う」の回答が10問中最も多かった。

質問11の自由記述では、クォーター制の良い点と改善点について英語授業を受講した2年生32名から率直な意見を聞いた。良い点として多かった意見では、授業内容を忘れないことや、セメスター制より集中できることだった。授業内容を忘れない理由としては、授業数が増えたことでクラスの授業内容に触れる機会が増し、前回の内容を思い出しやすくなり理解度が上がったことが考えられる。セメスター制より集中できる理由に関しては、期間がセメスター制の15週間からクォーター制の7週間と短縮され、先が見通しやすく集中しやすくなったことがプラスに働いたと推測できる。授業の効率が上がって、集中して取り組むことができることや、授業時間が増えた分英語に触れる時間が増えたこと、さらには充実感があるという内容の記述が見られたことから、1期の全体像が把握しやすくなり、英語と接する機会が増したことで以前より英語に対する親近感や上達している手応えが増したと考えられる。

改善点の意見として最も多かった回答が、課題が多いことだった。従来では1セメスター15週間で行う内容を、7週間の短期間に凝縮したことにより、多くの学生は苦労していたことが明らかになった。その次に多かったのが、105分授業が長いという内容の回答だった。ここでも同様に、授業内容を短期間に詰め込んだことで90分授業が105分授業に伸びたことがマイナスに働き、学生の集中力を低下させた結果につながったと推測される。これらの貴重な意見を参考に来期以降は、学生の負担を軽減できる環境改善に努めることが重要である。

５．考　察

本項では、アンケート調査の数値を参考に考察する。図2では、数値をパーセンテージの割合にして表した。

自由記述を除いた4択式回答、全10問では、「強くそう思う」と「ややそう思う」の回答の合計を3つのグループA、B、Cに分類した。グループAに関しては、「強くそう思う」と「ややそう思う」と肯定的な意見が約60％を超えているもので、質問1、3、7、8、9、10から

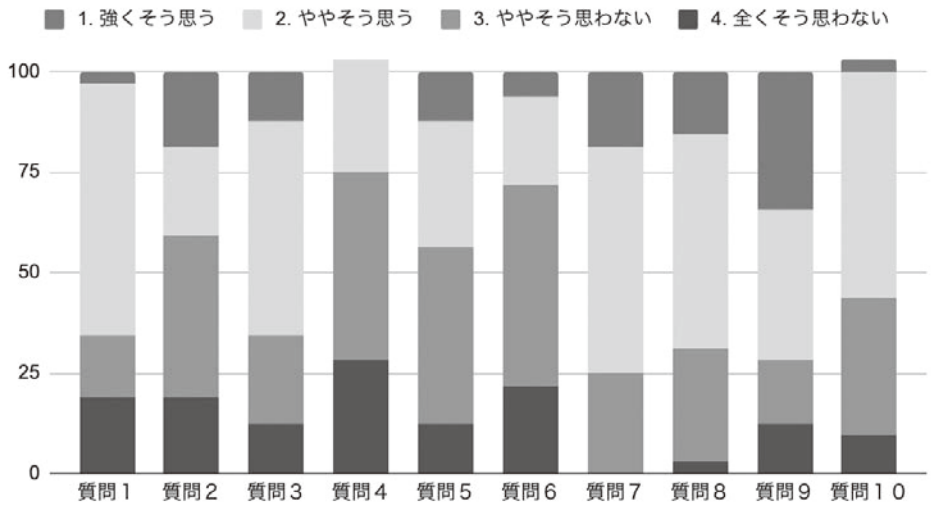

図２　FOE２b

（出典　近田（2018）、渡邉・渡邉（2022）を参考に筆者作成）

構成されている。グループBは、「強くそう思う」と「ややそう思う」の合計が40％台と中立からやや否定的な意見が見られた質問２と５である。グループCにおいては、「強くそう思う」と「ややそう思う」の合計が20％台と否定的な回答が多数見られた質問４と６である。これら３つのグループA、B、Cを、質問11の自由記述の回答とともに考察する。

５．１　グループA

グループAに関しては、質問１、３、７、８、９、10について、回答数値を参考に考察する。

表２．質問１　クォーター制英語授業は、セメスター制英語授業と比べて学習効果は上がった。

Q1	強くそう思う	ややそう思う	ややそう思わない	全くそう思わない	無回答
回答数（$N=32$）	1	20	5	6	0

（出典　近田（2018）を参考に筆者作成）

質問１に関しては、クォーター制に移行して学習効果が上がったかについての見解を表している。全体の約66％にあたる21名の学生が「強くそう思う」と「ややそう思う」という肯定的な回答を示した。その反面、約34％の11名は学習効果が上がったとは思わないと回答している。全体的な合意が得られた訳ではないが、過半数は何らかの学習効果を実感していることが明確になった。従来のセメスター制では15週間の期間があったが、クォーター制に移行したことで期間が７週間になった。そのことから、授業内容を短期集中型で連続してこなしたことが、授業内容の反復になり、学生の記憶に残りやすかったことが学習効果に繋がったと推測される。逆に、学習効果が上がったと感じない学生は、おそらくこの短期集中型の早いペース

に乗り切れず、授業内容を十分に消化できなかったことが原因ではないかと考えられる。

表 3．質問 3　クォーター制英語授業は、セメスター制英語授業と比べて集中力が上がった。

Q3	強くそう思う	ややそう思う	ややそう思わない	全くそう思わない	無回答
回答数 ($N=32$)	4	17	7	4	0

（出典　近田（2018）を参考に筆者作成）

質問 3 では、集中力が上がったと回答した学生が全体の約66％で21名、そう思わないと回答した学生が約64％で11名だった。質問 1 の学習効果と同様に、クォーター制が従来のセメスター制より短期集中型であることが、集中力を上げる要因になったと推測される。

表 4．質問 7　クォーター制英語授業は、セメスター制英語授業と比べて身体的、精神的負担が増えた。

Q7	強くそう思う	ややそう思う	ややそう思わない	全くそう思わない	無回答
回答数 ($N=32$)	6	18	8	0	0

（出典　近田（2018）を参考に筆者作成）

質問 7 では、身体的、精神的負担が増えたかを確認した。「強くそう思う」と「ややそう思う」の各回答が、両方とも全体で 2 番目に高い数値となり、この 2 つの合計が約75％で24名と本研究の最高値を示した。この結果、多くの学生はセメスター制よりクォーター制の方が身体的、精神的負担が大きいと感じていることが明確になった。自由記述では、課題の量が多いことに関する回答が多く見られたことから、クォーター制による短期集中型の授業進行によるマイナス面が顕著に現れたことが、学生の負担が増えた原因だと考えられる。今後は課題量の調整や、授業の途中で休憩を入れて時間の配分調整をするなど、学生の身体的、精神的負担を減らすための工夫が求められる。

表 5．質問 8　クォーター制英語授業は、セメスター制英語授業と比べて授業進度は適切で、授業内容を十分消化できた。

Q8	強くそう思う	ややそう思う	ややそう思わない	全くそう思わない	無回答
回答数 ($N=32$)	5	17	9	1	0

（出典　近田（2018）を参考に筆者作成）

質問 8 では、「強くそう思う」と「ややそう思う」の各回答が、両方とも全体で 3 番目に高い数値となり、この 2 つの合計が約69％で22名とこちらも全体で 3 番目に高い数値となった。自由記述では、授業進度が早くなったことで、内容転換の早さや集中力の持続が学生のモチベーションの維持に繋がり肯定的に受け入れられていることが明確になった。授業内容の消化に関しての意見としては、課題の量が増えたことで復習する機会が増え、授業内容を忘れる前

に消化できたことが明らかになった。

表 6．質問 9　クォーター制英語授業は、セメスター制英語授業と比べて授業時間外の学習時間が増えた。

Q9	強くそう思う	ややそう思う	ややそう思わない	全くそう思わない	無回答
回答数 (N = 32)	11	12	5	4	0

（出典　近田（2018）を参考に筆者作成）

質問 9 では、「強くそう思う」の回答が、約34％ 11名でこの項目の最高値となり、「強くそう思う」と「ややそう思う」の合計でも約72％で23名と全体 2 番目に高い数値であった。多くの学生は授業時間が延びたことや課題が増えたことで授業時間外の学習時間が増えたようである。

表 7．質問10　クォーター制英語授業には、満足している。

Q10	強くそう思う	ややそう思う	ややそう思わない	全くそう思わない	複数回答
回答数 (N= 33)	1	18	11	3	1

（出典　近田（2018）を参考に筆者作成）

質問10では、「強くそう思う」、「ややそう思う」と満足している学生が、約59％の19名、「ややそう思わない」、「全くそう思わない」と満足していない学生が約44％で14名であった。全体的に半数以上は満足しているが、満足していない学生も多くいることがわかった。クォーター制の授業進度、課題の量、105分授業に耐えられる生徒は、英語スキルの習得感があり肯定的に受け止められるが、耐えられない生徒には苦労が多かったことが推測される。

５．２　グループB

グループBでは、「強くそう思う」と「ややそう思う」2 項目の合計が40％となる質問 2 と 5 について数値を参考に考察する。

表 8．質問 2　クォーター制英語授業は、セメスター制英語授業と比べて出席率は上がった。

Q2	強くそう思う	ややそう思う	ややそう思わない	全くそう思わない	無回答
回答数 (N = 32)	6	7	13	3	1

（出典　近田（2018）を参考に筆者作成）

質問 2 では、クォーター制に移行して出席率が上がったかについての学生の見解を示している。全体の約41％、13名の学生が「強くそう思う」と「ややそう思う」と回答した。「ややそう思わない」と「全くそう思わない」と回答をした学生は、約59％で19人となり、否定的な回答が過半数になった。出席率が上がったと回答した学生では、授業進行がクォーター制の方

が早いため、一回授業を休むと遅れるスピードも早いと感じていることが明らかになった。

表９．質問５　クォーター制英語授業は、セメスター制英語授業と比べて先生やクラスメートと人間関係が構築できた。

Q5	強くそう思う	ややそう思う	ややそう思わない	全くそう思わない	無回答
回答数 ($N=32$)	4	10	14	4	0

（出典　早稲田大学（2020）を参考に筆者作成）

質問５では、約44％、14名の学生が「強くそう思う」と「ややそう思う」と回答した。「ややそう思わない」と「全くそう思わない」の回答では、約56％で18人となり、人間関係が構築できたと感じる学生は、そうでない生徒を下回る結果となった。

クラスメートや先生と会う頻度が増えたことで人間関係が構築しやすくなったことが明らかになった。その反面、期間がセメスター制の15週間からクォーター制では７週間になったことで、あっという間に一期が終わってしまうことが人間関係を構築しにくい原因だと考えられる。

５．３　グループC

次のグループCでは、「強くそう思う」と「ややそう思う」２項目の合計が20％と肯定的な回答が少ない質問４と６について考察する。

表10．質問４　クォーター制英語授業は、セメスター制英語授業と比べて宿題の量は適切だった。

Q4	強くそう思う	ややそう思う	ややそう思わない	全くそう思わない	複数回答
回答数 ($N=33$)	0	9	15	9	1

（出典　近田（2018）を参考に筆者作成）

質問４では、宿題の量が適切であったかを確認した。「強くそう思う」と回答した学生がこの項目では最低値の０名、「ややそう思う」を含めて約28％の９名である。

「ややそう思わない」と「全くそう思わない」の合計数が約75％の24名と、この項目の最高値である。今後は、学生の負担が少しでも軽減できるよう、課題量や提出期日を調整した環境を整えることが重要であると考える。

表11．質問６　クォーター制英語授業は、セメスター制英語授業と比べて１クラスの授業時間数（105分）は適切だった。

Q6	強くそう思う	ややそう思う	ややそう思わない	全くそう思わない	無回答
回答数 ($N=32$)	2	7	16	7	0

（出典　早稲田大学（2020）を参考に筆者作成）

質問6では、「ややそう思わない」と「全くそう思わない」の合計数が約72％の23名と、否定的意見がこの項目で2番目に高い数値である。改善策としては、こまめな休憩を入れるなど、学生の集中力の持続や苦痛の軽減に配慮することが重要だと考える。

６．結論と今後の課題

本稿では、城西国際大学2年生を対象とした、クォーター制導入における英語教育の実態調査を、アンケート調査の結果をもとに利点と改善点について検討した。

調査結果から、クォーター制の導入による良い点では、「授業の満足度」、「学習効果」、「授業進度」、「集中力」に関しては6割以上が、効果が上がったと考えていることが明らかになった。大学がクォーター制を導入した目的の一つとして、短期間で集中して学ぶ学習効果については、一定の効果があったことが明らかになった。改善点としては、「課題の量」、「105分授業」、「授業時間外の学習時間」に対しての不満や、身体的、精神的負担が増加したと感じている学生が多数いることが明らかになった。対応策としては、105分という長時間授業や課題の量を短期間に詰め込みすぎた状況を早急に改善することが重要だと考える。また、クォーター制導入に伴う担当教師や事務職員の準備の煩雑さを改善することや、大学側による制度の十分な説明を、職員や学生などの関係者全員が把握できるように、時間をかけて丹念に行うことが必要だと感じる。ただこれらは、導入初年度に準備が集中することから起こる原因だと感じられ、翌年度からは徐々に改善に向かうと推測する。

以上、本研究では少人数の英語授業を対象にした調査である。そのため、アンケートからの相関関係だけでは限界があり、今後も幅広い継続的な調査が必要とされる。さらに、制度導入後に海外留学や課外活動などの学外学習への機会が、実際にどのような広がりを見せているか、留学生の受け入れ促進状況は改善したのかなどの幅広い調査を行うことが今後の課題である。

【参考文献】

Morita, M. (2020). The Impact on English Education of Adopting the Quarter System at Hiroshima University *Hiroshima Studies in Language and Language Education, 23,* 121-136 doi.org/10.15027/48752

近田政博（2018）「クォーター制導入に対する大学関係者の反応―神戸大学の事例を中心に―」『大学教育研究』26：103−118.

西本佳代（2017）「全国国立大学におけるクォーター制等の導入・実施状況について」『香川大学教育研究』14：7−15.

渡邉勝仁・渡邉治郎（2022）「大学２年生を対象としたオンライン英語授業に関するアンケート調査の分析」『東洋大学観光学研究』21：157−171.

ウェブ検索：
城西国際大学（2022）「2022年4月からの105分授業とクォーター制の導入について」https://www.jiu.ac.jp/files/user/visitors/pdf/2022quarter_gpa.pdf（2022年4月5日閲覧）
文部科学省（2014）「学事暦の多様化とギャップイヤーを活用した学外学習プログラムの推進に向けて」（平成26年5月29日学事暦の多様化とギャップタームに関する検討会議）https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/57/siryo/__icsFiles/afieldfile/2014/04/08/1346418_01.pdf（2022年4月5日閲覧）

A Questionnaire Survey of English Language Education under the Quarter System:
In Comparison with the Semester System

Jiro Watanabe

Abstract

This research analysis of English education under the quarter system introduced in the 2022 academic year is conducted through a questionnaire survey of second-year students at Josai International University. Based on the results, the advantages of the system and points for improvement are discussed. First, more than 60% of the students felt that the system was effective in terms of "class satisfaction," "learning effectiveness," and "concentration," and they were satisfied with the "class progress. Second, the majority of students were dissatisfied with the "quantity of assignments" and the "105-minute class," and felt that the physical and mental burden had increased. Based on these survey results, future measures will be discussed.

Keywords: quarter system, globalization of education, english education,
efectiveness of education